

季刊

2005年 秋号/第11号

海堡

kaihou

東京湾海堡ファンクラブニュース

No.11

編集・発行/東京湾海堡ファンクラブ
会長 小坂一夫

発行日/2005年10月3日

題字は、明治39年10月1日陸軍大臣寺内正毅から外務大臣林董宛に提出した文書（外交史料館所蔵）より抜粋。
紋様は、尾形光琳：『八橋蒔絵硯箱』東京国立博物館所蔵より。

目次

- 追悼 高橋在久先生

高橋会長を偲んで	朝倉光夫
高橋会長を偲んで	西田好孝
高橋在久先生を偲んで	仲野正美
高橋先生を偲んで	小坂一夫
高橋在久先生を偲ぶ	松本庄次
「ざいきゅう先生」に感謝	勝 巖
高橋先生を偲んで	渡辺京子
高橋先生の思い出	島崎武雄
日本のモンサンミッシェル	高橋悦子
- 会長選任について
- 東京湾海堡ファンクラブ第7回見学会報告
- 第4回シンポジウム資料

海堡に生まれて	石見 潔
第一海堡の活用について	澤田勇太
- 会則/入会案内

- 平成12年(2000) 江戸川女子短期大学退職、名誉教授となる。文化財保護功労者として文部大臣表彰を受ける。
- 平成13年(2001) 富津市文化財審議会会長に就任。
- 平成14年(2002) 東京湾海堡ファンクラブ設立。会長に就任。
- 平成17年(2005) 逝去。



「東京湾海堡シンポジウム」で講演する高橋先生 (2004.12.18)

追悼 高橋在久先生

当ファンクラブ会長 高橋在久先生が2005年7月29日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

【高橋在久先生略歴】

- 昭和2年(1927) 青堀町(現富津市)に生まれる。
- 昭和45年(1970) 千葉県立上総博物館館長。
- 昭和48年(1973) 富津市文化財審議会委員になる。
- 昭和55年(1980) 千葉県立美術館館長に就任。
- 昭和60年(1985) 江戸川女子短期大学教授に就任。



見学会で説明を行う高橋先生 (2005.3.19)

高橋会長を偲んで

東京湾海堡ファンクラブ副会長 朝倉光夫

高橋会長に初めてお会いしたのは当クラブ立上げの会場でした。ガッシリとした体格でお声も高く、独特の話術で統率力が漲っているという感じを強く受けました。高橋会長から海堡ファンクラブの運営等でご意見を伺うことになってから、著書やテレビ、そして、数々のご講演等でお名前を拝見する機会が多く、大変、ご活躍されていることに驚きを覚えました。

富津を思い、千葉県の文化教育にご尽力され、誰よりも東京湾を愛した高橋会長。これから東京湾海堡の保護と活用について、高橋会長はどのように、お考えだったのか、『東京湾第三海堡建設史』（東京湾口航路事務所）が平成17年7月に刊行され、東京湾海堡の建設経緯が解りつつある中、海堡の歴史性を重んじ、どのように展開していけばいいのか、もっともつとご指導頂けるものと思っていました。

また、平成17年（2005）6月11日（土）、第4回東京湾海堡ファンクラブの通常総会で役員を選任があり、私にも副会長への推薦がありました。自分が？と躊躇したもの、高橋会長の下、会員の海堡に対する思いを形にするために、私に出来ることがあればと、不安に思いながら、簡単にお引き受け致しました。それも会長のご健在はもちろん、ご指示ご指導を頂けると思ったからであります。

誠に残念でなりません。今後、「東京湾の二つの海堡と湾口部の遺跡をどうするか」、広く調査・ご検討いただくために国や関係機関に働きかけ、構想を早く具現化させることがご遺志を継ぐこと、また、海堡ファンクラブの役割であると考えます。

突然の悲報に驚嘆し、言葉もありません。改めて、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

高橋先生を偲んで

東京湾海堡ファンクラブ幹事 西田好孝

東京湾海堡ファンクラブ幹事として高橋先生追悼号発行にあたり、心から哀悼の意を表しますと共に謹んでお別れの言葉を申しあげます。

平成12年（2000）、第三海堡撤去を機に東京湾海堡について

建設の経緯に関心がもたれ、平成14年（2002）にファンクラブが国土交通省東京湾口航路事務所のご後援を得て設立されましたが、先生には、当初より、その会長に就任され、識見を發揮されました。

先生は江戸川短期大学名誉教授をはじめ東京湾学会理事長、富津市文化財審議会会長など多くの要職をご歴任ご活躍され、千葉県の発展のために一生をささげられました。特に東京湾には強い思いをよせられ、残された第一・第二海堡についてはランドマーク構想を描いていらっしやうと承知しております。

海堡の実地調査のときなど、富津岬で「昔は大潮の時には、ここから歩いて渡っていました。」など、考え深く語っていらしたことが思い浮かびます。

『第三海堡建設史』が刊行されましたので、残された海堡の有効活用など本格的な討議に入るところでしたので、先生のご逝去は、ご専門分野でのご教示を戴く矢先のことで、大きな戸惑いを感じております。

残念の極みでございます。

これからは、先生のご教訓を生かし東京湾の整備に努力してまいります。

先生のご指導にお礼申し上げますと共に、ご冥福をこころからお祈りいたします。

高橋在久先生を偲んで

東京湾海堡ファンクラブ幹事 仲野正美

先生の訃報に接して、あんなに元気だったのにという気持ちでいっぱいでした。

富津に住む高橋先生と横須賀に住む私とを結びつけたのが、東京湾海堡ファンクラブの結成でした。東京湾海堡の保護・活用を目指して会が発足した時にご努力された先生を思うとき、東京湾をライフワークとされる高橋先生にとってまさに、ぴったりのお仕事ではなかったかと思っています。

その後、高橋先生とは親しくお話をさせていただくことになり、お話の中で大学の大先輩であることがわかりました。これもまた、海堡が結んだご縁なのでしょう。

私事で大変恐縮なのですが、大学時代、卒論で古代、古東海道の三浦半島と房総半島のつながりを取り上げました。その後、横須賀に職を得て、朝夕眺める房総半島には特別な思いがありました。しかし、日常にかまけて、その思いも薄れ

る一方でしたが、海堡ファンクラブの関係で房総に渡ることが多く（これには東京湾フェリーが大変便利）になって、また昔の思いが膨らんできました。それは東京湾という海は障害ではなく、交通・運輸の手段であったことを今更ながら確認させるものでした。

高橋先生の東京湾全体を通しての大局的な見地よりの論考・発言には、いつも感心させられるものでした。もっとお聞きすることは叶わなくなりました。大変悲しいことです。

私をはじめ、多くの方にご指導・ご示唆をいただいた高橋在久先生のご冥福をここで、お祈りするとともに、これからのファンクラブの益々の発展を先生にお願いして、筆を置きたいと思います。

高橋在久先生ありがとうございました。（合掌）

高橋先生を偲んで

東京湾海堡ファンクラブ幹事 小坂一夫

ファンクラブ総会終了後の6月のある日、第一海堡で生まれた石見潔さんの新聞記事のコピーを持って大堀の先生のお宅を訪れた。

声をかけても返事がなかったのでお留守かと思い帰ろうとしたら、奥様がお帰りになり、家の中にはずだということであった。先生は、休まれていた様子で、「あがりなさい。」とってくださり、座椅子にすわられた。座椅子から身体を起こす時も、「力が出ない。」とってテーブルのふちを両手でつかみ、腕の力で起こすほどで、「食欲も出ないんだよ。」と言われた。その際、「会長を続けるのは無理だからあとを頼む。」といわれたが、回復を信じ、「そのままいてほしい。」とお願いした。

先生は、その後、入院され、7月8日に幹事の有志で君津中央病院へ見舞に伺った。その時は、車椅子で面会室まで出てこられたが、お元気の頃は、だいぶ様子が変わられた。しかし、声には元気があった。

濤の会の長老のお二人も一年前には、大手術を受け、6ヶ月の闘病生活のあと元気になられ、濤の会に顔を出してくれているので、先生も回復し元気になると思っていたし、そう願っていた。

また、私の学生時代の恩師であり『近世漁村史の研究』の著書がある故荒居英次先生と同級生であることがわかり、先生は懐かしがられていた。荒居先生は、富津の名門である織

本家の古文書調査のため、戦後、木更津から自転車で織本家まで何度も通ったというほど熱心な先生であった。

嘗て先生が勤務され、富津公園内にあった「県立富津海洋資料館」で私の同級生の勉強を見ていたとのことで、先生は、彼のことを「せいざい」と呼んでいた。「せいざい」は、製材であった。

昨年10月に幹事で同級生の鈴木元（はじめ）さんが一年間の闘病生活の末に亡くなった。先生は、彼のネクタイをして海堡シンポジウムの基調講演をされたという。そのころは、頬がふっくらとしていたが、筋肉痛を訴えられていた。たまに検査入院されているということであった。3、4月の「濤の会」では、大分痩せられていた。

「海堡」については問題が山積しており、先生のご指導を得ながら、一つ一つ問題を解決していこうと思っていた矢先である。困ったなというのが現状である。が、会員の皆様のご協力の問題解決に向けて努力していきたいと思う。

先生、先生から引継ぎ「濤の会」で取り組んでいる記録史「富津岬」を必ず完成させます。

高橋在久先生を偲ぶ

東京湾海堡ファンクラブ幹事 松本庄次

在久先生と私との本格的な関わりは、商工観光課長時代にNHKの取材等で富津岬を中心とした東京湾についての地域の歴史に関することで先生宅へ伺ったのが初めてでした。私自身、商工観光課長時代に富津岬周辺を観光産業等にどう活用するかがテーマでした。在久先生は「東京湾口の富津岬、第一海堡、第二海堡、観音崎、猿島を海門として国の重要な文化的景観にするよう働きかけるのを晩年のライフワークにした」と情熱的に語っておられました。在久先生が江戸川女子短大を退職なされたと聞き、これを機会に公民館講座で富津岬を中心とした東京湾をテーマとした講座を開設できないのか先生にお願いしたところ、快く引き受けて頂きました。

こうして平成13年（2001）11月24日に総勢34名による「富津濤の会」が結成され、公民館事業の一環としての「東京湾学講座」として結実し、その記念すべき第1回が平成14年（2002）1月に実施されました。以来、「東京湾学講座」は受講生を増やしながら、平成15年度からは筑紫先生も常任講師として迎え、通算40回を超えるまでに至りました。その間、多数の受講生からの発表や貴重な報告等があり、現在、受講

生 80 名を迎え、地域の歴史や文化に関心のある人々が集い、各回ともに活発な質疑応答や自由な意見発表が飛び交って、正に「東京湾学講座」は熱気に包まれています。

県内、公民館は沢山ありますが、公民館講座にこれほど多くの男性が受講し、公民館利用者層の著しい広がりを見せたのも、この講座の大きな特色でありました。講座の中核にあって指揮をとっておられた在久先生の存在感の大きさが今もって実感されます。

在久先生も私も、この富津港をこよなく愛する人として、東京湾口の景相と海堡の形成と建設の歴史や、保護と活用の構想を示し、市が今後どのように活用し活性化し、また観光立県千葉への一翼を担うことを期待している次第です。

平成 16 年（2004）12 月 18 日に東京湾海堡シンポジウムが開催され、「東京湾口の富津岬、第一海堡、第二海堡、観音崎、猿島を海門として国の重要文化的景観」としての位置付けをしたことは非常に重要な意味があります。今後、東京湾海堡シンポジウムや東京湾学講座「富津藩の会」で在久先生がまいた種はいつか芽をふくに違いないと確信し、在久先生のこれまでのご指導に深く感謝するとともに、後世安楽を心からお祈り致します。



(2005.3.19)

「ざいきゅう先生」に感謝

東京湾海堡ファンクラブ幹事 勝巖

私が「富津藩の会」に長兄、一郎の誘いで最初に参加したのが、第三回の平成 14 年（2002）3 月 9 日、東京湾学探訪会「富津岬の未来学」でした。その日は天気も良く、公園で平野啓さんが持つ旗？のもとに集まり、多分に遠足気分、久しぶりに見る風景のなかにいた私でしたが、富津岬を東京湾

口のランドマークのセルボーン（自然と人間の強制のモデルとされるイギリスの村）化構想を熱っぽく語る先生のお話に引き込まれていきました。

この日、古里の過去・現在・そして未来を学ぶ場を与えて戴いたと確信致しました。

私の好きな詩に、「青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言う」で始まるサミュエル・ウルマンの「青春」があります。様相とは、優れた創造力、逞しき石、炎える情熱などを持つ心であり、先生は、青春そのものでした。そして何よりも人を安心させる、親しみ易さと話し易さがおありでした。

また、文化はいつの時代でも庶民の営みから生まれるとの強い信念をおもちでした。

地名にこだわり続けた先生が、7 世紀前半の古里にあった「須恵の国」の国名そのものが海から生まれた（洲江=すえ）との仮説をたて、海だった飯野平野が数千里の変化で陸化し洲になった。潟港（せきこう）は、日本武尊や古東海道の走水からの上陸地であり、陸上にランドマークを必要とし、要衝の地に内裏塚古墳群が作られたとする説は、全国的な広がりを持つ古代の大ロマンです。先生亡き後どう展開していくのだろうか。

平成 16 年（2004）12 月 18 日、富津公民館で開催された「東京湾海堡シンポジウム」は盛会でした。二年でここまで発展させ、講演された先生のお気持ちは如何だったでしょうか。

先生、8 月の例会でもう 43 回目になりました。お陰様で私のような者でも、この地の過去・現在・未来が少し分かり始めた気がいたします。どうもありがとうございました。

在久先生を偲んで

東京湾海堡ファンクラブ幹事 渡辺京子

二度の海堡シンポジウムにより、東京湾海堡への関心も高まり、これから保護と幅広い活用を訴え、あらゆる面で働きかけようとしていた矢先のこと、牽引役の先生はランドマーク・海門という言葉を残して亡くなられてしまいました。

2 月 1 日に毎年、富津東区で九代も前から脈々と受け継がれている漂着信仰の「秋葉様」にご一緒したのは、強風の寒い日でした。山里の百坂に出向き、狭い階段を登りつめたお社での祈祷、護摩焚きなど一部始終を参った後の接待で、近頃リウマチが出てきてねーと検査入院の旨、話されていまし

た。今思うに、あの階段はきつかったのではと。

最後の著書となられた『房総遺産』に我が先祖、柳敬介の画家としての偉業を目にし、思い立って信州穂高の礫山美術館を訪れたのは五月のこと。88歳の母を交え、ゆっくりお話しできたかと考えていた所でした。美術館長をされた先生ゆえ、こうした分野もとりあげて下さったのではと感慨深いものがあります。

今まで離れていた生まれ故郷、富津のよさを再確認できたのもそんな頃です。介護の息抜きに足繁く下洲海岸を歩いては珍しい貝を標本採集していた時など、ゴミの多さはさることながら何とかして車止め規制で、海浜植物群落を保護しなければと思うことしきりでした。公民館での公開講座としての“富津岬の年輪考”をお聞きした縁で、滞の会・東京湾学講座そして東京湾海堡ファンクラブへと視野も広がり、先生を軸とした結びつきで、今どんなにか人の輪に助けられていることでしょう。

7月に入りお見舞いに伺った折には、着物姿の車椅子でしたが、会の行く末を語っておられました。親しみ込めてお呼びしていた在久先生といえども病には勝てず、何とも残念でなりません。先生が日頃言葉にされた“東京湾口を海門として、国の重要文化的景観にするよう”それぞれの地元から声をあげていかねばと切に思うことです。

高橋先生の思い出

東京湾海堡ファンクラブ事務局長 島崎武雄

私は以前から東京湾の研究に従事していたので、高橋在久先生のお名前は御著書を通じて存じ上げていた。しかし、先生の訾訶に接するようになったのは、2001年3月以降、「東京湾第三海堡建設史」の調査を始めてからだだった。けれども、いつからお目にかかるようになったのか判然としなない。何とはなしに「昔から師事している先生」と思い込んでいたようである。先生には、そんな思い込みを許容して下さるような暖かさと大らかさがあった。

『東京湾第三海堡建設史』の調査にあたっては、高橋先生をはじめ、先生のもとに集まっておられた富津の「滞の会」のメンバーの方たちのご協力が大きな力となった。そのなかから、明治から大正年間に行われた東京湾海堡の建設に当たっては、富津を中心とする房総の人たちの貢献が大きかったことが明らかになった。「東京湾海堡は房総の人たちによって

造られた」といわれる所以である。私のなかでは、第三海堡を含め、東京湾海堡と富津の人たちとは切っても切れないものとしてある。その中心に、何となく高橋先生のイメージが存在している。

高橋先生は、「自分は東京湾の語り部になりたい」と仰っていた。そして、事実、東京湾学会の設立などを通じて「東京湾の語り部」の中核的存在となった。東京湾海堡の愛護を目指す我々、東京湾海堡ファンクラブのメンバーにとっては、先生の御逝去は早世としか思えない。まだまだ、高橋先生に頼るつもりであった。しかし、いまさら泣き言を言っても始まらない。これからは、東京湾海堡の補修、文化財指定、世界遺産登録、さらに再開発と活用を目指して進み、何よりも東京湾海堡を愛された先生の御遺志に応えたい。

日本のモンサンミッシェル

東京湾海堡ファンクラブ幹事 高橋悦子

高橋会長との最初の出会いは、会長の著書『東京湾水士記』（株）未来社発行、1982.12.1初版）でした。2000年の10月、第三海堡の歴史の調査をしていた私は、海堡に関する情報を少しでも収集したい一心で、著書の最後に記してあった住所を手がかりに会長宅へ電話をかけたのでした。高橋会長は、私の唐突な電話に対し、気さくにお答えくださいました。まったく面識のない方に電話をするのはとても緊張するものですが、会長の温かいお人柄がその話し方から伝わってきて、ほっとしたことを思い出します。その後、「富津滞の会」の設立総会に伺ったことをきっかけに、頻りに交流することになり、島崎事務局長とともに当ファンクラブを設立するまでに至りました。

高橋会長は、当ファンクラブ設立以前から「海堡は東京湾口のランドマーク」とおっしゃっていました。ランドマークには、①船から見た陸上の目標、②その土地の象徴となるような建物や記念碑の二つの意味があります。①の意味では、すでに海堡の建設当初から操船する人々にとって利用されてきた事実でしたが、②の意味を地域の人々と確立することが重要、と繰り返し話されていました。

2年ほど前、私は、地中海の港をめぐるクルーズを体験しました。そのときに気づいたことですが、ヨーロッパの港の高台には、どの港にも荘厳な教会とともに古い要塞が建っています。クルーズでの旅行の場合、海から港を見ることにな

るのですが、港に接岸するはるか遠くから教会や要塞の存在感が伝わってきました。さらに、要塞は大切に保存され、観光地となって整備されていました。要塞の建っている場所は、外敵から護るといふ本来の目的から、眺望がきき、とても良い景色を楽しむことができます。クルーズなどで来た観光客は、その土地の歴史を要塞から見える景色とともに知ることになります。この経験から、東京湾海堡は十分に湾口のランドマークになるということを確認しました。地中海で私が感じた思いと同じことを高橋会長は、「第一海堡とフランスのモンサンミッシェル (Mont-Saint-Michel) は共通した魅力がある。」と表現されていました。

高橋会長が急逝された今、東京湾海堡を真の意味での「東京湾口のランドマーク」とするべく、当ファンクラブの活動を通して実現することが、これまでお世話になった会長への恩返しであると感じています。海堡が「日本のモンサンミッシェル」と言われる日を目指して。

会長選任について

高橋先生の逝去に伴い、役員会の互選により、新会長にファンクラブ幹事の小坂一夫さんが選任されました。

小坂さんは 1947 年に富津市富津に生まれ、1969 年に日本大学文理学部史学科を卒業されました。34 年間勤めた JA を 2 年前に退職され、現在は富津市大佐和商工会の事務局長をされています。職務のかたわら、1983 年より富津市文化財審議会委員として、また東京湾学会理事として地域の文化財保全や東京湾の研究に従事されています。

東京湾海堡ファンクラブ第 7 回見学会報告

東京湾海堡ファンクラブ第 7 回見学会を下記の要領で実施しました。富津側と横須賀側から 29 名の参加がありました。

また、第二海堡への上陸は海上保安庁の許可が下りず、そのため一部予定を変更致しました。

記

日時：2005 年 7 月 23 日 (土)

集合場所：富津公民館、東京湾口航路事務所 (横須賀)

講師：ファンクラブ幹事 西田信吉氏

ファンクラブ幹事 小坂一夫氏

参加費：1,000 円 (傷害保険、資料代)

見学コース (富津)：富津公民館にてビデオ鑑賞→富津港→乗船→第一海堡近傍→第二海堡近傍→観音崎→東京湾口航路事務所 (横須賀組と合流) →追浜ケーソンヤード→東京湾口航路事務所→猿島→第三海堡撤去工事現場→富津港

見学コース (横須賀)：東京湾口航路事務所集合→東京湾口事務所にてビデオ鑑賞→乗船→猿島近傍→第三海堡撤去工事現場→第一海堡近傍→第二海堡→観音崎→東京湾口航路事務所→タクシーにて追浜展示場



船上での様子 (2005.7.23)



追浜ケーソンヤードでの説明 (2005.7.23)



追浜ケーソンヤードの見学 (1) (2005.7.23)



【第4回シンポジウム報告】

2005年6月11日に第4回ファンクラブ総会に続き、横須賀市中央図書館の共催で第4回シンポジウムを開催しました。100人を超える出席者があり、盛況に終了致しました。

海堡に生まれて

東京湾海堡ファンクラブ会員 石見 潔

【はじめに】

マスコミの報道、特にテレビが日清・日露・支那事変・第二次戦争等の近代史につき、国民に真実を伝えるキャンペー

ンを怠った。今日、アジア諸国の一部では日本苛めを公然と行ない、鎖国国家への道に戻そうとさえ伺えるデモ等を行ない、日本国民を迫害・侮辱している行為が起っている。財務省が「海堡」の一つに立入りを禁止していることも、歴史を歪め軽視していると思えない。機密島が公開されず処理されようとしているとしたら、「日本の城（海堡）」で生まれた人間は、憲法第三章第十四条『法の下での平等及び栄典（勲四等瑞宝章授与）』に抵触しているため、国民に問うこととなる。生まれ故郷（地域）がダムという公益の場となるならいざ知らず、弾丸があるかも知れないという不確かさだけで差別（自衛隊・レジャー利用者・釣り客・立入り許可証等で利用した人達がいた）し、再度渡航したい生誕者ですら行くことができないとしたら、日本の政治は話にならない「支離滅裂」だ。私の生涯を「海堡」が有効に国民にだけでなく世界の人々にも見て知ってもらい、戦後60年平和でいつづけた日本を再認識してもらうよう行動していきたい。

【生前】

明治維新で有名な山口（長州・周防錦帯橋の奥地）で、明治37年に生まれた父、東京湾口浦賀水道、走水・大津・馬掘海岸（横須賀市）沿いで、大正2年に生まれた母、二人が観音崎砲台で恋し結ばれ、東京湾要塞司令部の命で極秘に、深夜上官が新婚の住居に来て、「この場所から当分の間出張してもらうので身支度してついてきてくれ」とボートで連れていかれた場所が小さな島であった。着いてから「第一海堡」と知らされその後極秘任務につく。この時上官は「司令部の数人しかこのことは知らない」と、任務につき「極秘」を繰り返した。戦争が終わった後も任務につき一切を話すことなく、父は平成3年2月に他界し、その後少しずつ母から砲台の設計概要、仕事の内容、食糧調達、富津町の店、出生の状況、そこでおこった事件等につき知らされる。

父京一の軍役は、大正14年1月に広島野砲兵として第五連隊入隊、昭和5年3月東京湾要塞司令部付となり、昭和6年12月に第一海堡の砲軍（砲兵軍曹）として赴任となった。昭和9年4月金谷砲台に移転、昭和12年8月広島宇品港から支那事変に出動、北支・南支・北支・北満・中支・南支・仏印・中支・泰国・馬來・ペナン島・昭南島・ジャカルタ・スラバヤ・ニューギニア各地から昭和18年10月24日（正夢を見た）宇品港に帰還、昭和19年3月6日千葉陸軍防空学校乙種学生として入隊、昭和19年6月1日防空第23連隊付第一大隊本部付、昭和19年10月1日高射砲第133連隊中隊長として下関市彦島に転任、昭和20年4月20日陸軍大尉として

都城高射砲第 136 連隊中隊長名第二中隊長となり（昭和 20 年 7 月 25 日、日本天皇より勲四等瑞宝章授与される）沖縄戦に備える。敗戦後昭和 20 年 9 月 19 日召集解除となり、山口の疎開先に兵役解除となり帰宅する。昭和 20 年 11 月より桑根村収入役～森本木材(株)、神崎木材(株)、大和商工(株)、鈴木産業(株)の役員。岩国市社会福祉協議会理事、岩国市錦見町内会長としてボランティアに励み、平成 3 年広島県大野町から宮島（厳島・日本三景）が一望できる我が家で一生を終える。享年 86 才、9 人兄弟の次男。

母 キミエ（92 才、9 人姉妹の長女・写真）は、小原台下のサラリーマン（父柴田松太郎・横須賀海軍工廠勤務）と藤澤市六会の小倉佐次郎の長女（ハツ）弟に発明家（重治／世界初歩行する木馬・床屋の電飾看板・日本初銀座三越の電飾広告塔等）として大正 2 年 4 月に生まれ、小学校時代の思い出に、弟 慶二叔父と、父の土産の小刀を取り合い、右手首に怪我をしたが、気丈夫な母は驚かず笑って病院に行った。高等小学校卒業後、花嫁修行のため品川の貿易商 児玉家で 17 才まで過ごし、大津海岸近くの実家に帰ってきた。当時は横須賀小町と噂され写真館には数枚の写真がウインドウに飾られていたそうだ。母の妹（叔母・節子）は走水神社に嫁ぎ、社主を 19 代目で返上した義叔父は小学校長となり生涯を教育に携わった。周囲の話では、東京湾海堡の埋めたてに石を納めた話しは有名だと聞いたことがある。兄妹 9 人の内 8 人は東京中心に鎌倉・東京・横須賀・千葉で元気に生活している。

【誕生】

生まれてから立ちあがり、歩行し遊んだ 2 年半の間記憶にない。勿論周囲には誰もいない。どうして過ごしたか覚えがない。普通なら近所の人、周囲の目で子供ながらも環境情報として無意識にも意識化が早いはずだ。午前 8 時になると富津から一人、砲台の清掃管理の人（極秘）が日曜日以外は毎日働きに来ていた。必ず「おはよう」そして「さようなら」とご機嫌伺いがあったそうだ。すべて母からの情報として大人になって知った。

母は私が二才ごろから入り江で泳いで遊んでいたと話す。記憶があるはずだと言われてもまったく思い出せない。当然だろう、我が子に何歳ごろまで記憶があるかと聞くが 4～5 才ごろキャッチボールをした、船に乗って遊んだと覚えている。父と母、そして一人のスタッフ以外周囲数キロに人がいない。都会はもちろんだが田舎でも体験した人は少ないだろう。

1 才の誕生日が過ぎ、私（きよし）が一人でも遊ぶように

なった或る日、母が黒鯛を釣って帰ってきて、「きよし」が無呼吸状態で横になり倒れているのに気付き、父を呼びに行き、横須賀海軍病院に連絡、観音崎砲台から来たと偽り、手術室に上官（第一海堡に連れて行ってくれた人）のボートで運ばれてから四時間は経過（発見）している。死んだ状態だ。母の説明だと、近くの親兄弟にすら連絡できない。父は海堡から離れることができない。極秘島「海堡」の守備は有事に備えることが鉄則。手術室で「きよし」が天井高く足から吊るされ、口を開けた状態で喉に異物が詰まっていることが判明、手術に入って既に 5 時間は経過し、皮膚も青ざめ死を覚悟したと母から聞いた。普通は我が子の状態が瀕死だと親に相談するが、それも出来ない。母の精神状態は異常としか言えなかっただろう。一銭銅貨が肉付で取り出された。人工呼吸が必死に行なわれた。日本最高の手術担当軍医が「よかった」と歓喜したとき、母も大声で「泣いて喜んだ」と話してくれた。一週間の入院で完治、海堡に帰った。秘密を守ることがこんなにも大変なんだと、母は学んだとも話してくれた。「肉づきの一銭銅貨」と、陳列に標本のように「〇〇ちゃん 1.5 才が 5 時間の仮死状態から人工呼吸で生還」と詳細に説明され、約 1 年標本展示されたと祖父が病院の院長から聞いたそうだ。

昭和 10 年の春、妹英子が生まれた金谷砲台に転居した。

【離島】

金谷に着き三才になった。もちろん記憶はない、夏が来て海水浴に行き、幼児のくせに泳いでいるので周りの人から騒がれたそうだが、それも記憶になかった。

昭和 12 年 8 月父が広島宇品港より支那事変に行き、留守の間母の里、横須賀市大津小学校に入学のため移転する。

小学校 2 年生の春、ガキ大将になったつもりで喧嘩、眉間に大怪我をして、病院に入院するのが恐く、出血のまま逃げ廻った記憶がある。その証拠に今も眉間には切り傷の痕が大きく残っている。無意識に一銭銅貨の手術を五感でおぼえていたのだろう。

昭和 14 年の夏、浦賀ドックに売却した児玉の大津別荘が竣工、陸軍省と借家契約した。翌 15 年 1 月から澄田来四郎銃砲兵学校長が下宿され、母が食事のお世話をすることとなり、毎土曜日が楽しくなった。当時珍しい自動車が午前 7 時 30 分に門前につく、当番下士官が車のドアを開けると閣下が「きよし君乗りなさい」と先に乗せてくれた。15 分もすると学校の門に着く、大きな声で「敬礼」と挨拶される。最初は驚いた。7 時 55 分 7,000 名を前に「号令台に立ちなさい」と閣下

から指示され、お立ち台に直立に立つと「カシラーナカ」と号令の声が轟く、閣下から「敬礼しなさい」と言われ、その通りに行なうと「ナオレー」と号令がでる。

これが軍隊なんだと子供心に納得した。この状況が毎土曜日続いた。自然と規律を学んだ。プレッシャーが心地良さに変わる。閣下を「澄田の伯父さん」と呼ぶようになった。昭和15年の12月「支那方面に行くのでお父さんに会ったらきよし君は元気だと伝える」と約束して、握手してお別れした。年が明けた昭和16年、海軍の大佐が入居されることが決まった。今度は軍艦・潜水艦等に連れていってくれた。第二次世界大戦となり昭和17年4月18日大津海岸で貝を取っていたら、現在の防衛大学方面から数機の戦闘機が低空で近づいて、北2~30メートル先の水面に水柱が立つと同時にダダダと機銃掃射があった。もちろんそれが解かったのは夜大佐が帰宅されて知った。その時初めて驚いた。日本最初の米軍による空からの査察、空襲警報は鳴らなかった。

陸軍省から広島に帰るようにと昭和17年7月20日に連絡があった。昭和17年8月から広島市尾長国民学校に転校することになった。住まいは、みすの叔母さん（父の兄の奥さん日本一の軍専用産婆さん）の実家が広島市の中心立町の柳井自転車店のため、お願いして東蟹屋町に決めてもらった。

転校して間もなく、防火用水の大きいのを建設すると担任が教えてくれた。7月に完成する巨大な水槽は25メートルプールだと分かった。昭和17年8月転校した夏、広島第二中学校と水泳の競技をし、平泳ぎで中学生に勝った。プール竣工式のあと担任が「石見君25メートル平泳ぎで泳ぐように」と言われ、後に予算を国からとるのに防火用水としたと分かった。

【まとめ】

昭和55年の春、閣下の当番兵だった人から、澄田来四郎閣下がご健在だと知り、世田谷のご自宅を尋ね、お会いできた。それから度々お会いし、最後は米寿のお祝いにお宅にお邪魔して一週間後に他界された。第一海堡をお話する以上このご縁が不可思議を生むことと繋がるため講演にて…。

【第4回シンポジウム報告】

第一海堡の活用について

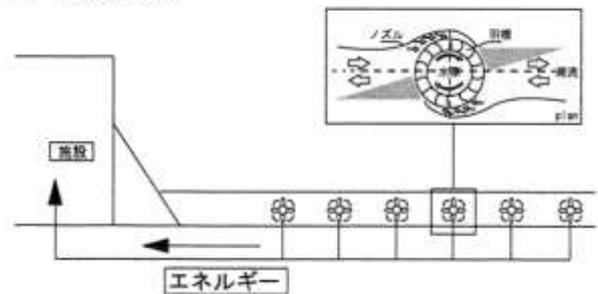
日本大学大学院 澤田勇太

私は、大学で建築を学んでいる学生です。今回、私は卒業設計で第一海堡に取り組み、その成果を皆様に聞いて頂きたく、この会報に載せて頂ける事になりました。

私が、第一海堡を選んだ理由は、最初、環境問題に目を向け、その改善策として挙げたのが潮流発電でした。その可能性と社会に対する認知を目的に東京湾の調査をしていた時に第一海堡の存在を知りました。そして、歴史的意義や現代的意義を把握した上で今回の卒業設計に取り組みました。見苦しい点があると思いますが、何とぞ、ある一つの見解だという認識でご覧頂ければ幸いです。

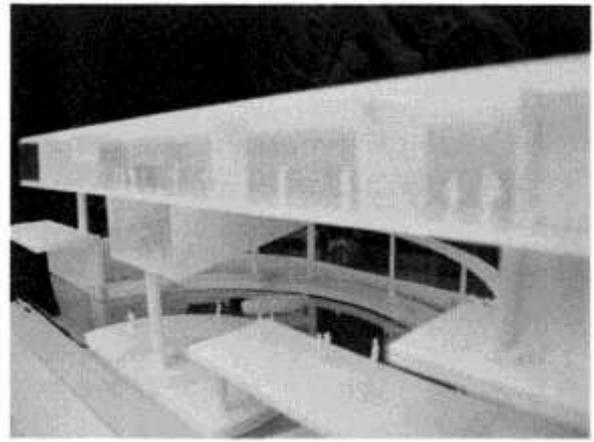


□ 潮流発電

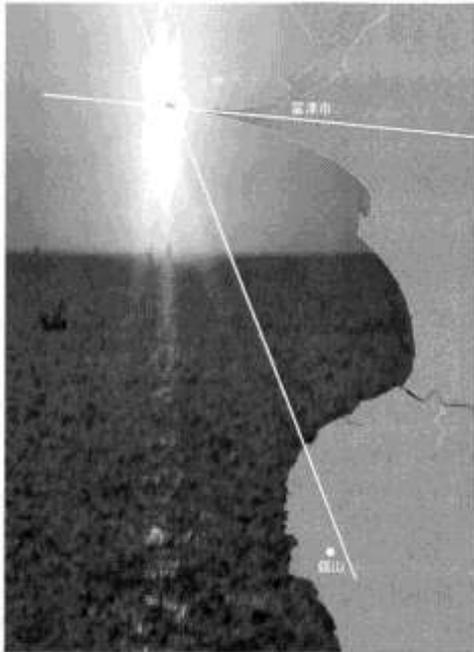


第一海堡は、ペリー来航を機に、明治政府が首都防衛を目的として建設した人工島である。横須賀～富津間を最重要防衛線として三つの人工島が置かれ、その海洋技術は、当時、世界に注目され、日本の近代化の一つの成果であった。その技術を支えたのは、富津の人々や資源であり、第一海堡を語る上で富津との関係を見捨てることは出来ない。

そして、軍事施設であった第一海堡は、現在、立ち入り禁止となっており、過去の記憶を封印したまま、東京湾のランドマークなどの視覚文化として近代的価値を内包しながら遺産として残っている。そこで今回、第一海堡が国土防衛や海民文化の情報集積や発信の砦となり、平和に対する再考の場となる事を期待し、展示の空間と祈りの空間を計画した。



【展示の空間】



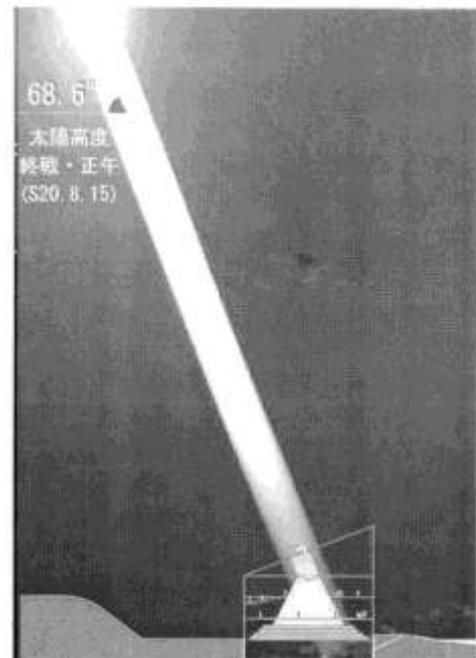
△ 軸の軌跡

第一海堡は、富津の資源（石材―鋸山、砂利―湊海岸）や技術（潜水夫―潜水器）、住民に支えられて、激しい自然環境の中、建設が行われた。

そこで、「場の記憶」を刻み込むため、建築に軸を与え、軸の先の世界に物語性を持たせた。

また、干潮差を利用して展示空間に海水を引き込み、自然とコラボレイトさせた。

【祈りの空間】



△ 祈りの光

○平和への光

太陽高度が、終戦（1945.8.15）の正午（ポツダム宣言公布時；68.6°）と一致した時、この祈りの空間に最も多くの光が注ぎ込まれる。

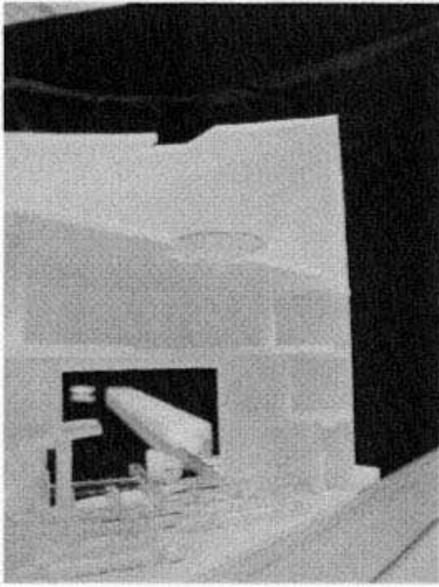
太陽高度 68.6° に対して屋根を垂直に傾け、光量が平和へと導く。

○慰霊・鎮魂への光

水面を通過し、乱反射した光は海堡建設時に遭難、溺死した人にとって、希望の光であった。そのような光を空間に落とし込むことで、この場所で遭難・溺死した人々に対する祈りを捧げる。

【古材バンク】

現在、撤去されている他の海堡の古材をこの施設の地下に保存し、第一海堡の修理・補修時に役立てる。また、古材を公開し、保存という行為に目を向けさせ、都市に対して、ここを機に「古材バンク」というシステムを社会に波及させていく。



シンポジウムの様子が掲載された新聞
 (『神奈川新聞』,2005.6.12)

ニュース

第4回シンポジウムの様子が神奈川新聞に紹介されました。

「第一海堡で生まれて」と題され、石見さんが母キミエさんから伝え聞いた、第一海堡に住んでいた当時は買い物をするにも一苦労だったエピソードなどが石見さんの講演の様子とともに掲載されました。

東京湾海堡ファンクラブ会則

第1条 (名称)

当会の名称は、「東京湾海堡 (とうきょうわんかいほう) ファンクラブ」とする。

第2条 (目的)

当会は、東京湾海堡を核にして人の輪をつくり、東京湾海堡の歴史の検証と普及、遺跡の整備と愛護、ランドマークとしての理解を深め、東京湾の歴史と未来をつなぐことを目的とする。

第3条 (事業)

- 当会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 東京湾海堡に関する研究会、講演会、見学視察会の実施。
 - (2) 会報の発行 (年4回)。
 - (3) 東京湾海堡に関する資料・情報の収集。
 - (4) その他、東京湾海堡への理解と愛護を深める活動。

第4条 (会員)

当会の目的、事業に賛同する個人または法人 (グループを含む) を会員とする。

第5条 (入退会と会費)

当会に入会しようとするものは、入会申込書により会長に申込みものとする。会長は、正当な理由がない限り、その入会を認めなければならない。当会を退会しようとするものは、退会届けを会長に提出し、任意に退会することができる。

会員は、下記の年間会費を納入する。

- 年間会費は、個人会員 2,000 円、法人会員 10,000 円とする。
会費は、毎年4月に支払うものとし、会費を支払わないときは退会したものみなす。

既納の会費は、いかなる理由があっても返還しない。

第6条 (総会)

- 総会は、当会の議決機関であり、年1回の通常総会および臨時総会とする。
- (1) 総会は、会員をもって構成する。
 - (2) 総会は、会員の過半数を定足数とする。ただし、定足数については委任状をもって代えることができる。
 - (3) 総会の議決は、出席した会員の過半数の賛同をもって行う。可否同数の場合は、議長の決すところによる。
 - (4) 会長は総会を召集し、総会の議長を勤める。
 - (5) 総会は、前年度の事業報告および収支決算の承認、当年度の事業計画および収支予算の決定、役員を選任、会則の変更、解散、合併、その他総会または役員会が必要と認める事項について議決を行う。

第7条 (会員の権利)

- 会員は、次の権利を有する。
- (1) 総会に参加すること。
 - (2) 研究会、講演会、見学視察会に参加すること。
 - (3) 会報の無料配布を受けること。
 - (4) 収集した資料・情報を閲覧すること。
 - (5) その他、当会が行う東京湾海堡への理解を深める活動に参加すること。

第8条 (資格の喪失)

会員が次の各号に該当するときは、その資格を喪失する。

- (1) 退会したとき。

第9条 (役員)

当会は、役員として、会長1名、副会長1名、幹事 (事務局長)、幹事 (会計) を含め、15名以内の幹事をおく。

役員は会員から総会において選任する。役員の任期は通常総会から次の通常総会までとするが、再任を妨げない。

第10条 (役員職務)

会長は、当会を代表し、その業務を総務する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。役員は役員会を組織し、当会の業務を行う。

第11条 (会計)

当会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第12条 (事務局)

当会の事務局事務所は、東京都台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル (株) 地域開発研究所内におく。事務局には事務局員若干名をおく。事務局員は会長が選任する。

第13条 (付則)

当会則は、2003年6月21日から改定実施する。

役員

- 会長 小坂一夫 (富津市文化財審議委員)
副会長 朝倉光夫 (東亜建設工業 (株))
幹事 西田好孝 (東京湾海堡建設従事者子孫代表)
幹事 仲野正美 (横須賀市立衣笠小学校教頭)
幹事 安室真弓 (東京湾学会理事)
幹事 松本庄次 (富津公民館長)
幹事 小沢洋 (富津公民館主査)
幹事 西田信吉 ((株) 港建技術サービス)
幹事 長崎哲士 (彫刻家)
幹事 勝 巖 (新横商事 (株))
幹事 高橋克 (江戸川短期大学)
幹事 渡辺京子 (富津藩の会幹事)
幹事 (事務局長) 島崎武雄 ((株) 地域開発研究所)
幹事 (会計) 高橋悦子 ((株) 地域開発研究所)

入会案内

東京湾海堡ファンクラブの活動主旨にご賛同いただける個人・法人 (グループを含む) の入会を募集しております。

入会希望者は、下記入事務局まで申込み用紙をご請求ください。申込み用紙は、ホームページ (<http://www.babu.jp/~kaihoufc/>) からでも入手できます。

会費は下記口座にご送金ください。

銀行振込口座

●東京都民銀行 御徒町(オチマチ)支店 普通預金 4011598

「東京湾海堡ファンクラブ会計高橋悦子 (トウキョウワンカイハウファンクラブカイケイタカハシエツコ)」

●郵便局 00140-9-665909「東京湾海堡ファンクラブ」

会費(年間) 個人会員：2,000円 法人会員：10,000円

事務局 〒110-0015 台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル

(株) 地域開発研究所内 東京湾海堡ファンクラブ事務局

事務局長：島崎武雄 会計：高橋悦子

電話 03-3831-2916 FAX 03-3836-4048

HomePage : <http://www.babu.jp/~kaihoufc/>

E-mail : kaihoufc@babu.jp

E-mail を事務局までご連絡ください。

見学会やシンポジウムの案内など、郵送より早くお知らせすることができます。

皆さまからのお便りをお待ちしています。

「海堡」に投稿ください。葉書、手紙、E-mail、写真、ご意見、近況、作品、随筆など、事務局までお寄せ願います。

第一海堡、第二海堡の活用方法についてもご意見もお待ちしています。

「海堡」 *kaihou* No.11

—東京湾海堡ファンクラブニュース— 第11号

東京湾海堡ファンクラブ 2005年10月3日発行